



## 「猿聾入」とグリム童話—その文芸性と倫理性—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹菊, 喬二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/1130">http://hdl.handle.net/10258/1130</a>

# 「猿掣入」とグリム昔話

—その文芸性と倫理性—

丹 菊 喬 二

## Die Märchen vom Affenbräutigam und die Grimmschen Märchen

— Die Erzähllästhetik und die Ethik des Märchens —

TANGIKU, Kyoji

Im japanischen Märchen vom Affenbräutigam wird das Ermorden des Affenbräutigams erzählt, der die Heldin im Austausch zur Braut erhalten hat. Selten sind die Varianten gefunden, in denen der Tierbräutigam durch die Mordtat der Heldin, wie im KHM 1, in Menschen verwandelt wird.

Weil in diesem Märchen der Wunsch des Vaters, seine Tochter im Austausch für den Dienst des Affen anzubieten, als anscheinend freiwillig erzählt wird, und weil der Tierbräutigam durchaus bis zum Tod als gegen Menschen anscheinend freundlich oder gar als selbstopferfertig erzählt wird, kann es den Märchenhörern (Märchenlesern) schwerfallen, mit der Helden zu sympathisieren und über das Ermorden des Tierbräutigams einfach froh zu sein.

Im folgenden wird versucht, ein Grundprinzip der Zaubermärchen von KHM als Schema: "Der Schwächere besiegt den Stärkeren" herauszufinden, und dann zu zeigen, daß diese Schema auch für die japanischen Affenbräutigammärchen gilt.

### は じ め に

日本の昔話に「猿掣入」<sup>1)</sup>という話群がある。広く分布している話であって、猿の妻となった娘が猿を溺死（転落死）せしめるという筋をもっているために、じゃっかんのとまどいを感じさせられる<sup>2)</sup>昔話である。本稿ではこの「猿掣入」を特に猿の死に着目しつつ、グリムの「子どもと家庭のための昔話集」の中のいくつかの昔話との共通点において観察し、この昔話を成り立たせている文芸性と倫理性を検討する。

### 1 昔話の文芸性と倫理性

昔話というものは語りつたえのなかでおそらく成立し、保存されてきたものであって、その語りつたえの現場における個々の語り手にとって昔話は勝手に変えることのできない固定したテキストとして存在する。もちろん昔話テキストが永久不変であるというのではなく、またひとりの語り手が語れば一つの昔話は一言半句の異同も示さないということではない。その話し手の保存

意識にとって話の同一性がそこなわれない範囲での異同をふくんだテキストの集合体として昔話が存在しているという意味である。昔話「猿舐入」の語り手 A から次の語り手 B への継承とは、語り手 A の保存意識にとっての「猿舐入」のそのようなテキストの集合 A の、語り手 B の保存意識にとっての「猿舐入」のそのようなテキストの集合 B による置き換えにはかならない。「猿舐入」のテキストは語り手たちの、そのようなそれ自体は同一を保証されてはいない保存意識の積みかさなりのフィルターを通されてきたものである。

昔話の語り手たちが、一方で「猿舐入」の娘のしあわせな生を語りつつ、他方でみずからの生を肯定してきたという伝承の実態としての事実は、昔話「猿舐入」が猿の殺害を肯定しているという表現を我々に許す。人間を昔話の語りつたえという行為に向かわせる力は、昔話の語りつたえから快感を得る人間の精神そのものの性質と、おそらく昔話の主人公と、昔話を語るものと、昔話の語られるのを聴くものとの、三者ともに死の側ではなく生の側にあるという共通性の認識あるいは一体感から来るのであろう。

昔話が言葉にかかわる人間精神のはたらきそのもの、あるいはその結果であるというかぎりにおいて昔話の文芸性というものを考えることができ、また昔話が生あるものの生に制約された精神の重々のはたらきの結果であるかぎり昔話は生の持続あるいは生の継承に力をかすものであるはずだから、昔話のなかに語られているものと、昔話を語るもの、聴くものの生との関係において昔話の倫理性というものを考えることができる。

## 2 「猿舐入」とグリム昔話集

### 「猿舐入」

おとつあんが、  
「手<sup>てん</sup>伝<sup>だ</sup>ってくれば褒<sup>ほう</sup>美<sup>び</sup>に娘をくれる」って猿に言ったって。そうしたら、猿はうれし<sup>し</sup>がって畑を手伝<sup>てん</sup>ゃあこまして（一所懸命手<sup>てん</sup>伝<sup>だ</sup>って）いたあ。

ある日、猿が娘をもらいに来たって。娘はね、  
「私<sup>わし</sup>が行<sup>い</sup>ってやる」って言ったって。娘は利口<sup>りく</sup>だあせえに、  
「行<sup>い</sup>ってやるだあけんどもしね、餅を搗<sup>た</sup>く石臼<sup>いしうす</sup>こしゃあて（作<sup>つく</sup>って）くれ」って言ったって。猿は、  
「変<sup>へん</sup>だなあ」って言ったって。だけんども娘は、  
「こけえらじゃあ娘が嫁<sup>よめ</sup>に行く<sup>い</sup>くならば、石臼<sup>いしうす</sup>をこしゃあて、舐<sup>し</sup>が<sup>よ</sup>背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>って行<sup>い</sup>くだあ。そういうふうな規則<sup>きそく</sup>だから」って言ってね、娘は猿に石臼<sup>いしうす</sup>背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>わして、猿の所<sup>ところ</sup>へ嫁<sup>よめ</sup>に行<sup>い</sup>ったって。

そして今<sup>こん</sup>度<sup>だ</sup>里<sup>り</sup>帰<sup>かえ</sup>りに行<sup>い</sup>くだあ。里<sup>り</sup>帰<sup>かえ</sup>りに行<sup>い</sup>くときにね、娘が、  
「私<sup>わし</sup>らほうじゃ里<sup>り</sup>帰<sup>かえ</sup>りに行<sup>い</sup>く時<sup>とき</sup>、夫<sup>おとこ</sup>が石臼<sup>いしうす</sup>背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>ってやんでく（歩<sup>あ</sup>いてい<sup>い</sup>く）きまりだあ」って言ったって。二人<sup>ふたり</sup>が歩<sup>あ</sup>いて行<sup>い</sup>くと、藤<sup>ふじ</sup>の花<sup>はな</sup>がたくさん下<sup>くだ</sup>っていた。池<sup>いけ</sup>の方<sup>かた</sup>へと吊<sup>た</sup>るさ<sup>さ</sup>がっていたあ。娘は、「あの花<sup>はな</sup>、一つ<sup>ひとつ</sup>欲しいな」って言ったって。猿は、

「俺、採ってきてやる」って言ったって。そうして手を伸ばした拍子に石臼を背負ったまま、池の中へドブンともぐっちまった。石臼が離れなきゃあようたに、娘がやじ力（ばか力）でしばっておいたからね、動きゃあ取れなきゃあ。ブクブクって沈んでしまったあって。——伊豆昔話集<sup>3)</sup>45

類話は多数あるが、娘が臼にこだわるのが明瞭に語られているという観点からこれを選んだ。小松和彦<sup>4)</sup>は、昔話における「主題」と民俗社会を論ずるにあたって、「猿掣入」昔話の主題として、

定式 1 爺とその分身たる末娘は、猿との間に労働力と末娘との交換をすることを装うことで、畑仕事を猿にさせたのち、末娘の知恵によって猿を殺して、反対給付としての娘の嫁入り（もしくは猿の住む世界への永住）を解消する。

定式 2 「人間」は「異類」との等価交換を装うことで「異類」から「富」を獲得し、そののちは「人間」の「知恵」によって、この「異類」との関係を「反対給付」することなく断つことができる。

を導きだして、この昔話が、昔話を生みだし、語り伝えてきた民俗社会がもつ「悪意」によって支配された物語であるとしている。

「猿掣入」に対する読者のとまどいはこの昔話が、娘による猿の殺害を、昔話の語りの展開として肯定しつつも、倫理的必然性として十分に正当化し得ていない（と感じられる）ことによるのであろう。

主人公による他者の殺害が昔話のなかでどのように肯定的に語られているか、その語り口の仕組みを一般化し、「猿掣入」にそれをあてはめてみることで「猿掣入」において猿の殺害がどのように肯定的に語られているかを探りたい。語り口の検討材料として、グリム兄弟の採集による「子どもと家庭のための昔話集」を検討する。昔話は、それを語り伝えてきた（そしておそらくそれを生みだしもした）民俗社会の特殊性の刻印を帯びているであろうが、また語り伝え文芸という同じ人間精神の活動のありさまとして、民俗を超えた共通性を示すはずである。

### 3 グリム昔話のなかの殺害

グリムの「子どもと家庭のための昔話集」（以下 KHM<sup>5)</sup>と略記する）には、主人公による他者の殺害の語られる昔話はいくつかある。それらを KMH 番号<sup>6)</sup>によってすべて挙げると、

KHM 1, 2, 4, 15, 20, 51, 57, 91, 105, 110, 111, 115, 122, 129, 136, 138, 150,  
166, 174, 181, 193, 197

の22話である。このうち、KHM 1, 4, 57, 138, 197の5話はみせかけの殺害として除外する。その理由は、

- KHM 1 主人公がカエルを壁にぶつけるが、カエルは美しい王子に変身するから、
- KHM 4 主人公が呪われた城に出没するネコと黒犬を殺すが、悪霊はあいかわらず出現するから、
- KHM 57 主人公がキツネを殺すが、キツネは変身して人間となるから、
- KHM 138 これはナンセンス話であって、不可能性を語るところにこの話のおもしろさがある。不可能な殺害は殺害ではないから、
- KHM 197 主人公が剣で野牛を倒すが、その体から火の鳥がまいあがる。殺害ではなく転生と言えるから、

である。

残る17話について、KHMの各話が主人公による殺害に対してどのような態度を示しているかをひとつずつ検討する。

- KHM 1 ネコがネズミを喰ってしまったというのであって、これはネコとネズミに対する日常の観察の結果に一致する。人間の立場からネズミに対するネコの害意を処断することをせず、現実（昔話の外の世界）として容認している。このような態度を「昔話のリアリズム」と呼ぶことにする。
- KHM 15 魔女が死んで父子三人うれいなく暮したと語られている。肯定的態度を示していると言える。
- KHM 20 主人公はハエを害虫としてたたき殺すのであろう。ハエの撲殺を可とする現実世界の一部を話のなかに利用している。昔話のリアリズムと言える。
- KHM 51 肯定的態度を示している。
- KHM 91 肯定的態度を示している。
- KHM 105 蛇が殺されたことと、子どもの死が関連づけられている。話の全体として、蛇を殺したことを非難している。否定的態度を示している。
- KHM 110 主人公が狩猟行為として小鳥を射殺する。昔話のリアリズムと言える。
- KHM 111 肯定的態度を示している。
- KHM 115 殺人者は最後に死刑に処せられたと語られている。否定的態度を示している。
- KHM 122 かりゅうどが小鳥を射殺することは、主人公の職業上の行為として容認される。昔話のリアリズムと言える。
- KHM 129 肯定的態度を示している。
- KHM 136 戦場で敵を殺すことはひろく容認されていると言わざるをえない。昔話のリアリズムと言える。
- KHM 150 老いた乞食を焼死から救わなかった若者は直接に話のなかで非難されている。否定的態度を示している。

KHM 166 肯定的態度を示している。

KHM 174 おびえという、人間の制御することのできない暗い力に対するおののき、もしくはおびえにとらえられた人間のおろかな行動に対する嘲笑または諦めの気持がこの話を成り立たせている。どちらかというところフクロウを焼殺したことに対して否定的である。

KHM 181 かりゅうどが鹿を射つ。職業上の行為として容認されている。昔話のリアリズムと言える。

KHM 193 肯定的態度を示している。

上に見てきたところから、KHMの昔話は、主人公による殺害に対して三通りの態度を示していると言える。KHM 2, 20, 110, 122, 136, 181の6話は殺害を昔話の外の世界の現実の一部分として特に肯定も否定もせず自明のものとして昔話のなかに取り込んでいる。KHM 105, 115, 150, 174の4話は否定的な態度を示している。KHM 15, 51, 91, 111, 129, 166, 193の7話は肯定的な態度を示している。

#### 4 殺害の語り方

次に、主人公による殺害が肯定的に語られているKHMの7つの昔話の、その殺害の語られている部分を抜き出して<sup>7)</sup>見ていく。その際、殺害に直接に関与する道具もしくはものについて最初に言及する抜き出しテキストに(A)を、殺害を語る抜き出しテキストには(B)を、ものについての言及が行われるテキストと殺害を語るテキストの両方を含むテキストには(AB)を付して示す。殺害が二度行われる場合には、それぞれ(A<sub>1</sub>), (B<sub>2</sub>)のように番号を付す。

##### KHM 15. HÄNSEL UND GRETEL (AB)

Aber Gretel merkte, was sie im Sinn hatte, und sprach "ich weiß nicht, wie ichs machen soll; wie komm ich da hinein?" "Dumme Gans," sagte die Alte, "die Öffnung ist groß genug, siehst du wohl, ich könnte selbst hinein," krabbelte heran und steckte den Kopf in den Backofen. Da gab ihr Gretel einen Stoß, daß sie weit hineinfuhr, machte die eiserne Tür zu und schob den Riegel vor. Hu! da fing sie an zu heulen, ganz grauselig; aber Gretel lief fort, und die gottlose Hexe mußte elendiglich verbrennen.

ところが、グレーテルは、ばあさんのたくらんでることに気がついて、「あたし、どうしていいかわかりゃしないわ。どうやってそんなかへはいるのよう」と言いました。

「ばっか、がちょう！ 口はこんなに大きいんだよ、見てみなよ、おいらだってへえれるくれえなもんじゃねえかよ」

丹 菊 喬 二

ばあさんはこう言いながら、蟹<sup>かに</sup>みたようにちょこまかあるいてきて、パンがまのなかへ、あたまをつっこみました。そこを、グレーテルが、どんと突くと、ばあさんは、とととと奥<sup>おく</sup>のほうへのめりこんだので、そのまま鉄<sup>てつ</sup>の戸をしめきって、かんぬきをさしこみました。ううっと、ばあさんはほえだしました。それはそれはものすごい声でした。グレーテルはどンドン逃げだしました。魔女は、神さまのばちがあたって、否<sup>いや</sup>も応<sup>おう</sup>もなくむごたらしく焼け死んでしまいました。(金田鬼一訳<sup>8)</sup>)

KHM 51. FUNDEVOGEL (AB)

Sprach Lenchen "werde zum Teich und ich die Ente drauf." Die Köchin aber kam herzu, und als sie den Teich sah, legte sie sich drüberhin und wollte ihn aussaufen. Aber die Ente kam schnell geschwommen, faßte sie mit ihrem Schnabel beim Kopf und zog sie ins Wasser hinein: da mußte die alte Hexe ertrinken.

レンぼうが言いました、

「お池になんさい。あたし、鴨<sup>かも</sup>になって、お池に浮いてる」

お料理番のばあさんが、やってきました。池を見ると、ばあさんは、池の上へ橋のように腹<sup>はら</sup>んばいになって、池を飲みほそうとしました。すると、鴨<sup>かも</sup>が、すばやく泳いできて、くちばしでばあさんのあたまをくわえて、ばあさんを水の中へひっぱりこみました。それで、魔法つかいのばあさんは、いやおうなしに、あっぶあっぶ、おぼれ死んでしまいました。(金田鬼一訳)

KHM 91. DAT ERDMÄNNEKEN (A)

De beiden annern Broer wullen wohl auck geren die Künigsdöchter wier hewen, awerst se wullen der kiene Möge un Gefahr umme doen, he möste so en grauten Korv nümmen, un möste sik mit sinen Hirschfänger un en Schelle darinne setten un sik herunterwinnen laten: .....

兄<sup>にい</sup>さんふたりもお姫さまを救<sup>い</sup>いだしたいのは山々なのだけれど、そうかといって、あぶないことをするのは嫌<sup>いや</sup>なのだ。おまえは大きなかごをもってきて、それからおまえの山刀と鈴を一つもってそのかごにはいって、井戸のなかへおろしてもらうがいい。(金田鬼一訳に下線部のみ丹菊加筆)

KHM 91. DAT ERDMÄNNEKEN (B)

Ase he ut den Korve stiegen is, da nümmet he sienen Hirschfänger un geit vor der ersten Doer staen un lustert, da hort he den Drachen gans lute schnarchen. He macket langsam de Döre

oppen, da sitt da de eine Königsdochter un häd op eren Schot niegene (neun) Drachenköppe liegen un luset de. Da nümmet he sinen Hirschfänger und hogget to, da siet de niegne Koppe awe.

わかいかりゅうどは、かごから出て、山刀をもって、一番めの扉<sup>とびら</sup>の前へ行って立ちぎきすると、竜がおそろしい大きないびきをかいているのがきこえました。ゆっくりゆっくり戸をあけてみたら、王さまのお姫さまが一人いて、自分の膝の上に竜の頭<sup>あたま</sup>を九つのせて、しらみをとっているところでした。かりゅうどは山刀<sup>き</sup>を手に斬ってかかって、頭を九つともちょんぎりしました。(金田鬼一訳)

#### KHM 111. DER GELERNTTE JÄGER (A<sub>1</sub>)

Da ging der junge Bursch mit, vermietete sich etliche Jahre bei ihm und lernte die Jägerei. Danach wollte er sich weiter versuchen, und der Jäger gab ihm nichts zum Lohn als eine Windbüchse, die hatte aber die Eigenschaft, wenn er damit einen Schuß tat, so traf er ohnfehlbar.

わかい職人は、その人について行って、なん<sup>なん</sup>年かやとわれて、かりゅうどのごとをならいました。年期があけると、職人はまたうでだめしに出かけることにしました。かりゅうどは、お給金だといって空気銃を一ちょうやったぎりでしたが、この空気銃はめずらしい力をもっていて、うちさえすれば、まちがいなくあたるのです。(金田鬼一訳)

#### KHM 111. DER GELERNTTE JÄGER (B<sub>1</sub>)

Danach setzte er sich auf ein Schiff und fuhr über das Wasser, und wie er bald beim Land war, kam das Hündlein gelaufen und wollte bellen, aber er kriegte seine Windbüchse und schoß es tot.

それから、かりゅうどは舟に乗って湖水をわたりました。そして、ほどなく陸<sup>おか</sup>へついたと思ったら、話にきいたちび犬がかけてきて、ほえようとしましたが、そのとたんに、かりゅうどは空気銃をとって、犬をうち殺しました。(金田鬼一訳、下線部のみ丹菊訳)

#### KHM 111. DER GELERNTTE JÄGER (A<sub>2</sub>)

Wie er das erste Zimmer aufmachte, hing da ein Säbel an der Wand, der war von purem Silber, und war ein goldener Stern darauf und des Königs Name; daneben aber lag auf einem Tisch ein versiegelter Brief, den brach er auf, und es stand darin, wer den Säbel hätte, könnte alles ums Leben bringen, was ihm vorkäme.



丹 菊 喬 二

最初のお部屋をあけると、そりかえっている片刃の刀が一振、壁にかかっていました。刀は純銀づくりで、黄金の星がついており、王さまの名前もしるしてあります。それとならんで、つくえの上に、封のしてある手紙が一通おいてありました。その封をきってみると、この刀を手に入れるものは、どんなものでも、その前にあらわれるものの命をとることができるか書いてあります。

KHM 111. DER GELERNTTE JÄGER (B<sub>2</sub>)

Nun kam der erste näher, da wickelte der Jäger des Riesen Haar um seine Hand, zog den Kopf herein und hieb ihn mit seinem Säbel in einem Streich ab, und duns (zog) ihn dann vollends hinein.

一人が穴のそこへ来ました。すると、かりゅうどはその髪の毛をぐるぐると手にまきつけて、あたまを中へひきずりこんで、その頭を例の刀でたった一打ちにころりとうちおとし、それから大入道のからだをまるごとひきずりこみました。

KHM 129. DIE VIER KUNSTREICHEN BRÜDER (A)

Den dritten Bruder nahm ein Jäger in die Lehre und gab ihm in allem, was zur Jägerei gehört, so guten Unterricht, daß er ein ausgelernter Jäger ward. Der Meister schenkte ihm beim Abschied eine Büchse und sprach "die fehlt nicht, was du damit aufs Korn nimmst, das triffst du sicher."

三番めの弟は、どこやらの狩人がお弟子にして、狩猟のことはなんでもかでも教えこみましたが、そのおしえかたがいかにもじょうずなので、お弟子はりっぱなかりゅうどになりました。親方は、別れるときに鉄砲を一ちょうお饞別にやって、(以上金田鬼一訳、以下丹菊訳)

「この鉄砲は的を外すということがないんだ。これでねらいさえすりゃ、おまえはなんだつて命中させられるんだ」と言いました。

KHM 129. DIE VIER KUNSTREICHEN BRÜDER (B)

Als er gerade über dem Schiff schwebte und sich herablassen wollte, legte der Jäger seine Büchse an und schoß ihm mitten ins Herz. Das Untier fiel tot herab, war aber so groß und gewaltig, daß es im Herabfallen das ganze Schiff zertrümmerte.

そして、船の上をひとまわりして、いざ、下へまいおりようとしたとたん、かりゅうどが、

例のてっぽうでねらいをつけて、心臓のまんなかを、ずどんと撃ちました。ばけものみたいな動物は、死んで、落っこちてきましたが、なにしろばかばかしく大きいので、落ちたときに、船を粉<sup>こな</sup>みじんにこわしてしまいました。(金田鬼一訳)

KHM 166. DER STARKE HANS (A)

Den nächsten Frühling sagte Hans "Vater, behaltet alles Geld und laßt mir einen zentnerschweren Spazierstab machen, damit ich in die Fremde gehen kann." Als der verlangte Stab fertig war, verließ er seines Vaters Haus, zog fort und kam in einen tiefen und finstern Wald.

あくる年の春、ハンスは、

「おとうさん、お錢<sup>あし</sup>は、みんなとときなさい。ぼくには百ポンドぐらいのめかたの杖<sup>つえ</sup>を一本こしらえてもらってくださいな、そうすれば、よその国へ行<sup>つえ</sup>ってこられるとおもいます」と言<sup>つえ</sup>いでした。

所望したつえができてくると、ハンスは父親の家をあとにして旅に出かけ、おくぶかいまっくらな森へはいりました。(金田鬼一訳に下線部のみ丹菊加筆)

KHM 166. DER STARKE HANS (B)

Sie aber war mit Ketten gebunden und blickte ihn so traurig an, daß Hans großes Mitleid empfand und dachte "du mußt sie aus der Gewalt des bösen Zwerges erlösen," und gab ihm einen Streich mit seinem Stab, daß er tot niedersank.

ところがおとめは鎖<sup>くさり</sup>でしばられていて、いかにも悲しそうにハンスをながめたので、ハンスは、かわいそうでたまらず、「なにがなんでも、この一寸ぼうしの悪党<sup>あくとう</sup>の手からすくいでしてやらなきゃならん」と、こうかんがえて、もっていた杖で、ばかりと一つくらわせましたら、一寸ぼうしは、ころりと死んでしまいました。(金田鬼一訳)

KHM 193. DER TROMMLER (A)

"Hör mich an," sprach das Mädchen, "wenn die Hexe kommt, wird sie dir allerlei auftragen: tust du ohne Furcht, was sie verlangt, so kann sie dir nichts anhaben: fürchtest du dich aber, so packt dich das Feuer und verzehrt dich. Zuletzt, wenn du alles getan hast, so packe sie mit beiden Händen und wirf sie mitten in die Glut." Das Mädchen ging fort, und die Alte kam herangeschlichen, "hu! mich friert," sagte sie "aber das ist ein Feuer, das brennt, das wärmt mir die alten Knochen, da wird mir wohl. Aber dort liegt ein Klotz, der will nicht brennen, den hol

mir heraus. Hast du das noch getan, so bist du frei und kannst ziehen, wohin du willst. Nur munter hinein.”

「よっくきいといてちょうだいよ」と、むすめが言いました、「まほうつかいの婆さんがまいますと、あなたにいろいろの御用をいいつけますからね、ばあさんのしろということ、なんでも、びくびくしずにするのよ、こわがらずにやれば、あなた、どうもされやしないことよ。けれども、もしも、あなたが怖がろうものなら、火があなたをつかまえて、べろりと食べてしまいますよ。それから、もうひとつ、やるだけのことをみんなしてしまったら、ばあさんを両手でおさえつけて、もえてる火のまんなかへほうりこむのですよ」

むすめは行ってしまいました。婆さんが、音もたてず、しのびよって来ました。

「ほう、さむい寒い」と、ばあさんが言いました、「火がもえてるぞ、このくらの火なら、ばばあのとしをくった骨も暖まって気もちがいいのう。だが、あすこに、どうしても燃えないぼつ杭があるねえ、あいつを持ちだしてきておくれな。このしごとをもう一つやったら、おまえは、天下晴れて、どこへでも行きたいところへ、かってに行くがいい。さ、威勢よく、火んなかへはいんなよ」(金田鬼一訳)

#### KHM 193. DER TROMMLER (B)

Aber die Alte lachte giftig und sprach “du meinst, du hättest sie, aber du hast sie noch nicht.” Eben wollte sie auf das Mädchen losgehen und es fortziehen, da packte er die Alte mit beiden Händen, hob sie in die Höhe und warf sie den Flammen in den Rachen, die über ihr zusammenschlugen, als freuten sie sich, daß sie eine Hexe verzehren sollten.

婆さんは、毒々しくわらいながら、

「おまえ、この女が手にはいったとおもうのかえ、どうして、まあだ、まだ」と言いました。そして、王女を目がけて駈けよるなり、もうすこしでさらって行こうとしたところを、太鼓たたきが、ばあさんを両手でおさえつけ、ぐっと持ちあげて、大きな口をあいてる焰の中へほうりこみました。ほのおは、さもさも、まほうつかいの婆さんをたべる役目をおおせつかったのを喜ぶように、ばあさんのからだの上で、ぴたりと口をふさいでしまいました。(金田鬼一訳)

### 5 殺害と文芸性

ところで昔話が話として語りつがれ、聴きつがれるためには、昔話はおもしろくなくてはならない。昔話の文芸性と言ってもよい。上の7話の文芸性は、一つに、逆転のおもしろさにあると言えよう。弱者の強者に対する勝利である。

KHM 15「ヘンゼルとグレーテル」では主人公は、親に捨てられ、魔女によってとらわれの身となる。魔女はヘンゼルを檻禁することができるのに、ヘンゼルは檻から脱出することができない。魔女はグレーテルに命令することができるのに、グレーテルには服従することしかできない。魔女の強さ、主人公の弱さが何に由来するものであるかについて、この昔話は語るところがない。主人公を弱いもの、魔女を強いものとして対比的に差し出しているだけである。

その強い魔女が死ぬ場面は、魔女がグレーテルを殺そうと自分でととのえた道具立て（パンがま）に、みずからすすんであたまをつっこんだと語られていて、グレーテルが魔女を焼殺するのではない。パンがまにあたまをつっこんだ魔女をグレーテルがどんと突くと、魔女がパンがまの奥のほうへのめりこんだというのも、魔女がのめりこんだのであって、グレーテルが押しこんだとは語られていない。グレーテルがパンがまの鉄の戸をしめきって、かんぬきをさしこんだというのも、その行為自体はパンがまの日常の使用法であって、ことさら殺害に特殊な行為ではない。結局、グレーテルは魔女の殺害に際して、日常的な力を発揮しただけであって、その日常は、強者・弱者の対比において一貫して弱者として語られているものであった。

ここに弱者の強者に対する勝利という逆転を見ることができる。勝利を実現するのは、弱者の強さではなく（弱者の強さは語られていないのであるから）、強者の強さである。これを図式化して示せば、

- <逆転 1> 弱者が勝利する
- <逆転の力 1> 強者の殺意と力
- <逆転の結果 1> 弱者の自己解放

となろう。

KHM 51「めっけ鳥」では、主人公としてめっけ鳥とレンぼうを考えるとすると、主人公たちは一方的に追われるものとして語られており、主人公たちの変身能力も追手の下男の目をくらますことはできても魔女の目をくらますには充分でなく、追いつかれ、見破られてしまう。ここでも魔女と主人公たちは強者・弱者として対比的に語られている。魔女は、池（めっけ鳥の変身したもの）を飲みほそうとして、池におぼれて死ぬ。池を飲みほそうと身をのりだしたのは魔女の行為であって、鴨の力によるものではない。鴨がくちばしでものをくわえてひっばるというのも、鴨としてあたり前の行動としてさりげなく語られると言ってよい。弱者が弱者にふさわしい行動をしている。飲みほす (austriinken) とおぼれる (ertrinken) の差は結果の差にすぎない。ここでも強者の強者としての行動が弱者の勝利を実現しているものであって、弱者は一度も強者の立場に立ってはいない。ここでも KHM 15と同じく図式、

- <逆転 1> 弱者が勝利する
- <逆転の力 1> 強者の殺意と力
- <逆転の結果 1> 弱者の自己解放

が成り立つ。

KHM 91「地もぐり一寸ぼうし」では、主人公が竜の九つの首を、主人公がかりゅうどとして以前から所持していた山刀で斬る。抜き出しテキスト(A)で語られているように、末弟に対してことさらに武器と道具の指示が与えられる。この山刀は呪的能力を持ったものではない。二人の兄たちもかりゅうどとして山刀を所持しているだろうのに彼らには指示が与えられない。末弟は、王や多くの若ものや二人の兄たちと同じように、王女たちをとらえて放さない未知の強い力に対決しようという気はあっても、その方法を知らず、その力を持たない弱者のひとりとして出発するが、途中地もぐり一寸ぼうしの指示のおかげで、依然として弱者の地位にとどまる二人の兄たちとことなると、強者の立場に立つにいたる。その際どうして末弟だけが指示をうけることができるのか、あるいは末弟が一寸ぼうしに対してそもそもどうして兄たちとことなった態度をとるのかは語られていない。差異は語られるが差異の理由、由来は語られない。

主人公は一寸ぼうしから指示を与えられることで、未知の強い力を凌駕する立場に立つが、この立場の逆転は主人公の意図や判断の当否によるものではなく、一寸ぼうしという第三者の出現によるものである。第三者の出現およびそれによる指示は、逆転を招来すると同時に、主人公の選出の役目も果しているが、その選出の規準は語られていない<sup>9)</sup>。またこの指示は、昔話の聴き手にとっては、話の展開の予告(伏線)という効果ももちうる。予告とその成就という語り方は、ゆるやかな逆転を語るものだと言える。

KHM 111「じょうずなかりゅうど」では、錠まえやの職人がかりゅうどとなったのち、黒犬を射殺する(抜き出しテキスト B<sub>1</sub>)が、命中はこのとき主人公が使う空気銃のおかげである。この銃さえあれば、主人公はすぐれた射手である必要はないはずであるのに、主人公はすぐれた射手であると語られている。またかりゅうどになるまえに錠まえやの職人であったことの必然性は語られないのに、やはりそのことが語られている。主人公と主人公でないものの差異が主人公の意図や希望としてではなく、それに無関係ななにごとかの結果として語られているのである。この銃は、抜き出しテキスト A<sub>2</sub>で語られる無敵の刀の獲得にいたる過程で使用されるだけで、その後射殺の用には供されない。抜き出しテキスト B<sub>2</sub>で語られる大入道たちの殺害は無敵の刀の力によるものである。主人公の立場の弱から強への逆転は、主人公の意図・希望と関係なく他から与えられた空気銃および無敵の刀の力によるものであると言える。ここでも逆転は予告とその成就という語り口によってゆるやかに実現している。

KHM 129「名人四人兄弟」では貧乏な男の4人の伴たちが、必らず命中する銃その他の道具・能力を獲得することで竜に対して優位に立つ。特に、なんでも見える遠眼鏡、なんでも縫える針、必らず命中する銃は修業ののち与えられるものである。これら道具・能力を獲得することで主人公の選出がおこなわれることになるが、主人公たちはこの段階ではとらわれの王女の存在を知らない。竜と主人公たちの力の逆転は、主人公たちが王女の救出に出発する時点ですでに始っ

るのであるが、逆転の力は、王女救出という目的に合わせて主人公たちがみずから獲得したものではない。

KHM 166「強力ハンス」では二歳のハンスと母親が森のなかで強盗たちにさらわれる。母親には強盗の棲家での労働が割り当てられるが、強盗たちへのハンスの貢献は語られない。強盗たちはハンスの母親を家事に使役しつつ、ハンスの成長を待っているかのようだ（という母親の推測が語られている）。二年にわたるハンスの自己解放の試みとその成功が語られている。ここに第一の逆転を見ることができよう。かどわかすもの、あるいは食物を与えるものとしての強盗（強者）対かどわかされたもの、あるいは食物を与えられるものとしてのハンス（弱者）。弱者の強者に対する勝利である。ハンスは強盗の棲家での成長（あるいは養育）ののち強盗に勝利するのであって、ハンスの力の強さ、あるいはじょうぶな棍棒をつくる能力は強盗たちから食物という形で与えられたものである。先に KHM 15, 51の検討から導き出した<逆転 1>、<逆転の力 1>、<逆転の結果 1>がここでも成り立っているように見えるが、ここでは殺害が明示的に語られていない。

抜き出しテキスト B で語られる殺害に用いられる杖はハンスが強盗を打ちのめすのに使う棍棒とはことになって、ハンスがみずからの手でつくったものではない。やはり他人につくってもらうのである（抜き出しテキスト A）。

殺される小人はもみねじり、岩鳴りというハンスの二人の道連れよりも強い存在として語られていて、ハンスによる小人の殺害が語られるよりまえにハンスと他の二人との差異が語られている。

小人の死は強者の弱者の立場への転落と言うことができる。ハンスの勝利をもたらす力がめかたの重い杖に秘められているものであるとしても、あるいは重い杖を使いこなすハンス自身のなみはずれた腕力であるとしても、いずれも他からハンスに与えられたものであった。ハンスはこの物語の初めに弱者として登場し、力を得て強者としての小人を殺すことで強者となる。ここに第二の逆転が起きている。この逆転は第一の逆転によって成立した強弱関係をもとにもどすのではなく、第一の逆転を反復する形で語られている。第一の逆転は第二の逆転を予告するものであったと言える。あるいは第一、第二の逆転は漸次的に語られる一つの逆転であるとも言えよう。

KHM 91, 111, 129, 166の話で語られる逆転を図式化して示すと、

<逆転 2> 弱者が強者となる

<逆転の力 2> 差異を示した弱者に（その後）他から与えられる

<逆転の結果 2> 弱者の救出

となろう。

KHM 193「たいこたたき」 魔女の力によってとらえられている王女を救うためにガラス山になんとかたどりついた主人公は魔女から与えられる仕事を独力ではたすことができない。ひと

りの娘の言うがままに行動するばかりである。娘の三度目の指示には主人公を焼殺しようとする魔法の殺意への警告も含まれている（抜き出しテキスト A）。娘の指示に従って魔法の命令を完遂する（燃えないほっ杭を火中からとりだす）と王女が解放され、魔法の命令には含まれないが娘の指示には含まれている行為（魔法を火中に投げこむこと）をすると魔法が死ぬ。魔法はみずから命じてつくらせた焰に焼かれて死ぬ。たくらんだ本人が死ぬのである。ここに逆転を見ることができる。焼殺の手段としての火は主人公がつくりだしたものではなく、魔法のとらわれびとである娘が魔法から命ぜられた主人公に代って燃したものであって、もとはといえば魔法の力によってととのえられた手段であると言える。王女をとらえ、主人公を殺すための手段を有する強者として魔法と、王女を救う手続きも知らず手段も持たぬ弱者としての主人公の対決は、弱者の強者に対する逆転勝利に終わっていると言える。魔法のとらわれびとたる娘が行動の指示を与えることで主人公が魔法に勝利するという語りのしくみも、弱者の勝利は弱者の力によらず、強者の力によると一般化できよう。

<逆転 1>

<逆転の力 1>

<逆転の結果 1>

が成立する。

以上 KHM の 7 話の語りのしくみを検討して、語りもの文芸としての昔話のおもしろさの一つが逆転にあることを明らかにすることができたと考える。そしてその逆転は、KHM 15, 51, 193 の 3 話から、

<逆転 1> 弱者が勝利する

<逆転の力 1> 強者の殺意と力

<逆転の結果 1> 弱者の自己解放

KHM 91, 111, 129, 166 の 4 話から、

<逆転 2> 弱者が強者になる

<逆転の力 2> 差異を示した弱者に（その後に）他から与えられる

<逆転の結果 2> 弱者の救出

と一般化できる。

## 6 「猿髯入」の文芸性

次に日本昔話「猿髯入」を検討する。「猿髯入」も語りもの文芸として世代から世代へ語りつがれ聴きつがれてきたものであるからその文芸性として話のおもしろさというものを考えることができる。ところで我々はさしあたり、口づたえ文芸の語り、聴く、その口づたえの現場にいるのではなく、口づたえ昔話の文字化された形（印刷昔話）の読者として日本昔話「猿髯入」を読

み、あるいはグリムによって文字化された KHM を読んでいるわけである。「猿掣入」を生みだし、語り伝え、文字化した民俗社会と、KHM に含まれている昔話を生みだし、語り伝え、あるいはこれを文字化したグリム兄弟を育てた民俗社会との同質性を前提することはできないが、我々が「猿掣入」を語り伝えてきた民俗社会の民俗に無知であり、KHM を生みだした民俗社会の民俗に無知であっても、ともにそのなかにおもしろさを見いだして読むことができるという事実が「猿掣入」と KHM の同質性を予想させる。「猿掣入」と、先に検討した KHM の 7 話とに共通した文芸性のひとつとして逆転のおもしろさがあると考えられる。

「猿掣入」の語り方の例を、先の検討から得られた<逆転 1>、<逆転の力 1>、<逆転の結果 1>に即して検討する。

語りの初めの段階をみると、猿は娘の父よりも、農事の労働の局面（北蒲原昔話集<sup>10</sup> 5）において、農事の自然的側面に対する支配力（福岡昔話集<sup>11</sup> 214）において、農事の呪術的の局面（津軽昔話集<sup>12</sup> 3）において、山仕事の労働の局面において、人間生活の妨害者（西讃岐地方昔話集<sup>13</sup> 13）として、強いものとして、あるいは娘の父に対して支配力を行使するものとして語られている。農事にかかわる呪術的能力（「一粒、一粒になあれ」）を別にすると、猿は身体的（物理的）に強いものとして語られている。娘の父と猿は一種の交換契約をむすぶと言えるが、この契約条項を実行する（労働あるいは支配力の行使もしくは不行使）力を猿が有することは語られるが、父のその力（娘を服従させる力）は語られない。この段階で猿は娘の父との対比において身体的（物理的）強者として語られている。

娘と猿が父の家を離れる段階で娘に石臼（吾妻昔話集<sup>14</sup> 十二 2）、みずがめ（鹿児島昔話集<sup>15</sup> 14）が与えられるが、これを背負うのは娘ではなく猿である。最初は娘がみずからもって行って、川のでまえて猿にもたせる（芸備昔話集<sup>16</sup> 6・1）という語り方もあるが、これは昔話のリアリズム（本稿 3 参照）と言えよう。現実の世界では、二人で重いものを運ぶ際に途中でなんないか交替することがある。

猿が死ぬ段階では、猿が嫁入りの道中で死ぬのが語られる場合も、里帰りの途中で死ぬのが語られる場合もともに、木の実（津軽昔話集 3）を、あるいは、娘が川に落したものを回収するために川には行って流される（安芸国昔話集<sup>17</sup> 7、其の 1）にしても、また娘によってはいる草履の髭を踏まれて（鹿児島昔話集 14）にしても猿は一貫して身体的強者として語られている。したがって猿の死は弱者の敗北ではなく、強者の敗北すなわち弱者の勝利であると言えよう。<逆転 1>がなりたっていると見えよう。

猿の殺意は語られていない。それに反して娘の殺意は明白に語られている（吾妻昔話集 12・1 の例では娘の殺意が明白に語られているとは言えないが、娘に殺意がなかったと解釈するのは無理だと考える）。猿は娘の殺意に気づかない。殺意に気づかぬまま自然の理を計算に入れた娘の要求に従ってとる猿の行動が、自然の理に従って猿の死を招くわけである。猿は半面では自らの



力（体力）によってほろぶと言えるし、半面では娘の殺意と、娘の利用する自然の理とによって殺されるとも言える。〈逆転の力 1〉は完全にはあてはまらないと言えよう。娘を猿に対して弱者ととらえるならば、猿の死によって娘は解放されるから、〈逆転の結果 1〉はなり立つと言えよう。全体として、

- 〈逆転 1〉 娘の勝利 一成り立つ
- 〈逆転の力 1〉 猿の殺意 一成り立たない
- 〈逆転の結果 1〉 娘の自己解放一成り立つ

となり、この図式は「猿掣入」にはあてはまらないということになる。

次に〈逆転 2〉、〈逆転の力 2〉、〈逆転の結果 2〉に即して検討する。

娘が父よりも強い力を有するとは語られていないから、父（弱者）に対して強者の立場にある猿との関係でみると、娘は物語の初めの段階では弱者の立場にあると言えよう。その弱者が強者（猿）には予測できない自然の理（に対する娘の理解）を利用することで強者を殺すに至る。弱者が力を得て強者の立場に立つという展開をみるができる。〈逆転 2〉があてはまると言える。弱者の得た力とは「猿掣入」の場合、自然の理（の理解）であるが、これは娘の知恵と言いかえてもよいだろう。知恵は人間の属性の一つであるとしてこの娘にもとから備っていると語られているだろうか。人間はけものどちがって知恵あるものだという考えは我々の現実認識としても承認しうるものだが、「猿掣入」はここでこのような（昔話の外の世界の）現実をそのまま語りの素材として使っているのだろうか。知恵が人間の属性であるならば、誰でもこれを有するはずだが、娘の父は猿との契約の重荷から知恵をもって脱することができない。父に知恵なく娘に知恵ありなのだから、知恵が娘一般の属性として語られているかというところでもない。父は心配のあまり食事もしない。娘が三人あって、食事をすすめる一番娘に父が猿の嫁に行くように頼むと、

「やれやれ、そげなことなら、よう聞かん。

せんちぶんぶんになってもよう行かん」

という。二番目の姉は、

「そげなことなら、ふっきやるになってもよう行かん」

という。末娘は、

「お父さんのためならなあ、猿の所でも嫁さんに行きてあげる」

といった（伯耆の昔話<sup>18)</sup>、猿掣入）。

結果的には末娘だけが知恵を発揮するのだが、この知恵は人間の属性として末娘が父、姉たちと人間であることで共有しているものではなく、やはり昔話の語りの途中で末娘に与えられるものである。知恵は、銃、杖、剣などどちがって手にとることのできるものではないので、娘に知恵が与えられるのが語りのなかのどこにおいてであるのかわかりにくい。

父と猿との契約が語られる段階で、父に娘が三人あることは既に語られていて、上に示した父と三人の娘とのやりとりの段階では、娘たちのあいだの差異が語られていることが注意をひく。姉二人は猿の嫁になることを拒否し、末娘は承諾するという差異が語られている。差異を語ることが主人公の選出のはたらきをするか、または差異が語られた直後に主人公が選出される事情は先に見たとおりである。二人娘の差異が語られる場合もある（福岡昔話集 214）。父母が娘を猿の嫁にやることにしてから一人娘が悲しくて七日七晩泣き明かしたのちにあきらめたという語り方（下野昔話集<sup>19)</sup> 31）もある。この場合、差異は複数の人物のあいだの差異としてではなく同一人物の時間的な差異として語られていることになる。力としての知恵は主人公に対してのみ与えられているのである。〈逆転の力 2〉もあてはまる。

〈逆転の結果 2〉に即して検討する。猿の死によって解放されるのが娘であるとするならば、  
〈逆転の結果 2〉=弱者の自己解放

ということになって、これは「猿掣入」がKHM 15, 51, 193と同じく弱者自己解放型の話だということになる。「猿掣入」に〈逆転の力 1〉があてはまらないことはすでに見たとおりである。娘はところで猿にかどわかされたのではなく、みずからの意志で猿の嫁に行ったのではなかったか。KHM 91, 111, 129, 166の主人公たちは例外なくみずからの意志で王女の救出に向っている。また王女たちは例外なくみずからの意志に無関係に、またはみずからの意志に反してとらわれの身となっている。「猿掣入」においてとらわれの王女とは誰か。みずからの意志に反して契約にとらわれているもの、すなわち娘の父である。猿の死によって救出されるとらわれの人として娘の父をあてはめると〈逆転の結果 2〉が成り立つと言えよう。

〈逆転 2〉 弱者（娘）が強者になる

〈逆転の力 2〉 差異を示した（父に対する同情）弱者（娘）にその後、他（外）から力（知恵）が与えられる

〈逆転の結果 2〉 弱者（父）の救出

が全体として成り立っていると言える。

このように考えると娘に対する猿掣の殺意が語られないことも理解できる。KHM 91, 111, 129, 166において竜や小人は王女のかどわかしの継続を望むばかりであって、それ自体がすでに悪意であるのでことさらに殺意を語る必要がないのである。

また、「猿掣入」において猿を殺した娘が父のもとに帰るといふ結末も、KHMの129を除く3話において主人公が救出された王女と結婚するという結末にみあっている。

以上のいくつかのグリム昔話の検討から得られた図式を「猿掣入」にあてはめることによって、「猿掣入」が弱者救出型の昔話であること、したがって、娘の殺意あるいは娘と父を含む人間一般の悪意を前提として成り立っている話ではないこと、また「猿掣入」の文芸性は、逆転のおもしろさに関するかぎり、グリム昔話の文芸性に一致することが明らかになったと考える。

本稿の「はじめに」に述べた「猿掣入」に対するとまどいは、この昔話が、猿と娘の父との間の外見上の自由契約、猿と娘との結婚、妻への猿掣の敬意、義父への猿掣の思いやりなど人間的習俗、または社会生活上の徳目を素材として含んでいるために、父または娘に対する猿の支配が、本来的には強者の力による弱者への脅かしであることがわかりにくいことに由来すると言えよう。また「猿掣入」の個々の語り方あるいは語り手の意識に影響を与えているものとして、完全に自由な意志によらない結婚も現実にはあること、不当な契約でも契約は現実生活では守らざるを得ない場合もあることなどの現実認識を挙げることができるかもしれない。

本稿では娘の「知恵」をKHM各話における「無敵の刀」、「必中の銃」などの武器あるいは道具と同列に扱ったが、はたしてそれは許されるであろうか。

末娘あ家さ帰ってから、このわけしゃべったど。すたら爺さまあ、姉娘達さ向がって、  
「何もごせやぐごどねえ（腹立てることはない）。頭どいうものは、使いようでよっ」ってし  
えったど。（遠野の昔話<sup>20</sup>）、猿掣入）

では、頭は道具と同じように「使うべきもの」と認識されている。

## 6 昔話の倫理性

これまで日本昔話「猿掣入」とグリム昔話のいくつかを検討することから、昔話の文芸性として、図式、

<逆転 1> 弱者の勝利

<逆転 2> 弱者が強者になる

を見いだすことができた。<逆転 1>と<逆転 2>は結局のところ、

<逆転> 弱者の勝利

という形に統一することができよう。

ところで、昔話の外の世界に住む我々の現実認識では、弱者は勝利するものではなく、勝利するものはつねに強者である。あるいは、勝利したものが強者と呼ばれるとも言える。一方、人間はその生の営為の局面において、失意の人は、そのまま打ちのめされたものとして、得意の人はなおその得意の不足によって、また得意を失う可能性によって脅かされたものとして、みずからを強者ではなく弱者として意識するであろう。弱者としてみずからを意識する人間が、自己の生を肯定するには、精神の自由なはたらきの所産たる昔話のなかでは、敗北する弱者にではなく、勝利する弱者に自己を同一化するほかない。自己解放型主人公による殺害も、弱者救出型主人公による殺害も昔話自身が肯定している。昔話の倫理性をここに見ることができる。

— 注 —

- 1) 日本昔話大成番号 103.
- 2) たとえば、松田修：「悪の思想とその伝承」（「伝統と現代」保存版，伝統と現代社 1983）65頁.
- 3) 鈴木暹編，岩崎美術社 1975.
- 4) 小松和彦：「猿掣への殺意—昔話における「主題」と民俗社会—」（日本昔話研究集成 4，名著出版 昭和59年，33-58頁）.
- 5) Kinder-und Hausmärchen, gesammelt durch die Brüder Grimm（グリム兄弟によって集められた子どもと家庭のための昔話集）の略.
- 6) KHM 番号は KHM 第7版 1857，による番号.
- 7) KHM の底本として Kinder-und Hausmärchen, gesammelt durch die Brüder Grimm, Darmstadt 1985をもちいた.
- 8) 日本語訳の底本として「完訳グリム童話集(一)~(五)」（岩波文庫，岩波書店 1975-1979）を使用した.
- 9) マックス・リュティは，主人公が第三者の援助を受けることができ，主人公でない他の人々がそれを受られないのには，主人公が主人公であるということ以外には理由がないことがあると述べている（Max Lüthi: Das europäische Märchen, 3. Auflage (Dalp-Taschenbuch) 1968, S. 54）.
- 10) 佐久間惇一編，岩崎美術社 1974.
- 11) 福岡県教育会編，岩崎美術社 1975.
- 12) 斎藤正編，岩崎美術社 1974.
- 13) 武田明編，岩崎美術社 1975.
- 14) 榎谷明編，岩崎美術社 1979.
- 15) 有馬英子編，岩崎美術社 1974.
- 16) 村岡浅夫編，岩崎美術社 1975.
- 17) 磯貝勇編，岩崎美術社 1974.
- 18) 福田晃・宮岡薫・宮岡洋子編，日本放送出版協会 昭和51年.
- 19) 加藤嘉一・高橋勝利編，岩崎美術社 1975.
- 20) 遠野民話同好会編，日本放送出版協会 昭和50年.

(昭和61年5月21日 受理)